

後も十分な follow up が必要と考えられた。

討した。

クモ膜下腔の形態異常像と脳室の描出を認めない群 11 例の頭部計数率 6 時間値に対する 24 時間値の比 (C_{24}/C_6) および 48 時間値の比 (C_{48}/C_6) はクモ膜下腔の形態異常像と脳室の描出のいずれか一方または両方を認める各群の両比と比べて有意 ($P < 0.01$) に小さかった。また、脳室の描出 (+) 群は (-) 群と比べ、さらに脳表クモ膜下腔の形態異常像 (+) 群は脳槽の形態異常像 (+) 群と比べ、両比がともに大きかった。しかし、両比はこれら各群間で有意差を示さないことが多かった。そこで、その要因を調べる目的で、脳槽の形態異常像を認める例について、脳槽狭小群と脳槽拡大群間で両比を比較したところ、両比は前者と比べて後者にて有意 ($P < 0.01$) に大きく、また C_{24}/C_6 に対する C_{48}/C_6 の比も前者と比べて後者にて大きな値となった。

以上のごとく、RI Cisternography の形態的所見と機能的所見とは相互に関連しており、これらの所見を的確に把握することが髄液動態を検査するうえに有用である。今後も、さらに症例を重ねて検討したい。

9. Hot nodule と見誤った甲状腺癌の 1 例

。道岸 隆敏 利波 紀久 久田 欣一
(金大・核)
真田 茂 安東 醇
(金大医技・短)

症例は右頸部腫瘍を主訴とする 57 歳の主婦である。血中甲状腺ホルモンは *enthyroid* であり、Microsome・Thyroid とともに (-) であった。触診では、 8×4 cm の右葉のみ触知し、下極に表面凹凸不整の stony hard の境界不鮮明な腫瘍を触知した。 ^{131}I 甲状腺スキャンでは腺瘤は hot であり左葉はほとんど描出されなかった。 T_3 -suppression では suppression ratio は 51.9% で、TSH-stimulation では明瞭に左葉の描出を認めた。病理診断は甲状腺濾胞癌であり、autoradiogram では癌自体は cold で周囲に ^{131}I が取り込まれていた。癌周囲は autonomous にみられる所見を認めず正常組織像であった。

癌自体は cold であるにもかかわらず ^{131}I スキャンにて hot nodule を呈し、しかも反対側の描出を認めないという興味ある所見を呈した甲状腺癌の 1 例を報告した。

10. RI Cisternography の形態的所見と機能的所見の比較検討

。仙田 宏平 今枝 孟義 松浦 省三
(岐大・放)

頭蓋内疾患を中心とする 62 例を対象にし、 $^{169}\text{Yb-DTPA}$ 0.15~1.0 mCi を腰椎クモ膜下腔へ注入後 3, 6, 24 および 48 時間にシンチカメラで頭部の正面と左右側面のシンチフォトを撮像するとともに、各面の平均計数率を計測して、脳槽および脳表クモ膜下腔の形態的所見と脳室の描出および頭部計数率の経時的变化の機能的所見を比較検

11. 外傷性内頸動脈閉塞症

——脳スキャン上の経過——

。山田 勝治 乗岡 栄一
(福井県立病院・放)
藤井 博之 村田 秀秋
(同・脳神経外)
前田 敏男 油野 民雄
(金大・核)

頭部外傷後、内頸動脈の閉塞を起こし、脳スキャンで Water-shed-infarction を示した小児の症例を報告する。

症例：1 歳 5 カ月の男児である。乳母車から落ち、半日後に右片麻痺と傾眠状態が生じ 2 日後に福井県立病院脳外科に入院した。入院時は右片麻痺、瞳孔不同および傾眠状態であった。